

健康・スポーツ科学科目における成績評価のあり方と今後の課題

九州大学健康科学センター 杉山 佳生

1. はじめに

本稿は、平成15年9月に実施された九州大学全学FD - 適正な成績評価のあり方とその実現に向けて - において、全学教育の健康・スポーツ科学科目に関して討議された内容をまとめたものである。

健康・スポーツ科学科目のうち、健康・スポーツ科学実習（1単位）及び健康・スポーツ科学講義（2単位）が全学必修となっているが、担当部局である健康科学センターでは、毎年、年度初めに、これらの科目を担当する専任教官及び非常勤講師に対する授業説明会及び講習会を実施し、成績評価についても、その基準や配点等の確認を行っている。

しかし、FD開催に合わせて実施された成績評価に関する実態調査により、担当教官の間で評価の分布にかなりの相違があることが確認された。そこで、今回のFDでは、健康・スポーツ科学科目を担当している専任教官9名の参加を得て、成績評価の実態や各教官の考え方などについて意見交換をするとともに、今後の成績評価の方向性や改善方策について討議した。以下、健康・スポーツ科学実習、健康・スポーツ科学講義のそれぞれに対し、評価の現状、データや討議から浮かび上がってきた問題点、そして、そこから導き出された対応策や提言についてを、私見を交えて論じたいと思う。

2. 健康・スポーツ科学実習について

(1) 現 状

健康・スポーツ科学実習は、1年次前期に開講されている全学必修科目であり、全クラス共通のシラバスに基づいて実施されている。授業では、九州大学健康科学センター編「健康・スポーツ科学実習 実習ノート」を全学生に配付しているが、その実習ノートには、授業の目的、授業計画、授業内容、評価方法の概要等が記載されている。また、同一時間帯に4クラス（1クラス約50名）が並行して授業を行い、授業内容によっては合同クラスや混成クラスを構成するため、クラスの違いによる授業内容の相違は生じにくいと考えられる。

しかしながら、成績評価という点については、担当教官の自由裁量がある程度認められているため、評価のばらつきが見られているのが現実である。成績評価の基本方針 - 毎年度初めの授業説明会でも確認されている - としては、総授業回数の4分の3以上の出席者（全学教育規定にある学期末試験の受験資格は3分の2以上）に対し、出席状況、理解度、技術、受講態度、レポート等に特定の配点をするにしているが、それぞれの評価項目における詳細な採点基準については、各担当教官に委ねられている。例えば、出席点について、トータルとしての配点はおおよそ決められているが、1回の出席、欠席をどの程度のウエイトで評価するかは絶対的な基準は設けられていない。このような教官裁量部分が、クラス間の評価分布の違いに影響していることが推測される。

一方、評価を相対評価ではなく絶対評価で行っていることも、クラス間の分布の相違を生み出している原因であると考えられる。各担当教官は、同一学期に、通常、1～3クラスを担当しており、また、合同クラスや混成クラスによる授業では、担当以外のクラスの様子を知ることができるために、クラス間の雰囲気や動機づけの違いを実感することが可能なのだが、実際に、複数の教官が、クラス間に学習意欲や緊張感の違いがあるという印象を持ったことがあると報告している。このことから、クラス間の評価分布の相違が、一概に、担当教官の評価方法のあり方の違いによるものとは言いきれないところがある。評価分布のクラス間の差が何により強く影響されているかについては、さらに詳細なデータを収集し、分析する必要があるかもしれない。

(2) 問題点

とはいえ、各教官の評価のあり方の違いが、クラス間の評価分布様態のばらつきの一要因となっていることは否めないだろう。もしそうであるとすれば、具体的に、どのようなところにその原因があるのだろうか。FDにおける討議では、いくつかの考えられる原因について、考察を試みた。

まず、出席状況に対する評価の問題が取り上げられた。健康・スポーツ科学実習は、測定や運動を実際に体験し体得することを重視する授業であるため、出席の比重が他の評価項目よりも大きく設定されている。そのため、この出席点の取り扱いが総合評価に強く影響することが予想される。出席点の総点については、基本方針があるために、教官間の違いはほとんど生じないと考えられるが、詳細な得点化方法については、前述したように、必ずしも教官間でコンセンサスが得られているとは限らないようである。すなわち、1回の出席、欠席の評価をどの程度の割合にするのかについて、それぞれの教官が独自の論理を持っている可能性のあることを、討議からうかがい知ることができた。いずれの考え方も、それなりの理論的根拠を持っているために、ある意味、「適正」と評価することができるものである。しかし、異なるクラス間で「公正」であるかどうかという観点から見れば、解決しておかなければならない問題であると考えられる。

また、実習ノートには、評価の観点として、理解度、技術、態度が挙げられているが、これらをどのように評価するかも、検討すべき問題だと言えるだろう。筆者の個人的な見解では、理解度や測定技術の習得については、本授業では、高度なものではなく、最低限の基礎的な理解や技術の習得を要求しているので、単位取得者については、ほとんど差が見られないはずである。したがって、これらの評価項目の中で評価に個人差が生じるのは受講態度ということになるが、この項目についても、明確な基準が設定できていないのが現状である。教官の過度な主観的評価になることを避けるため、毎回の授業時において実習ノートに記載させた測定記録やその考察、授業の感想等を評価材料とする場合もあり、実際にそれで態度を評価している教官もいるが、果たしてこのような方法で授業態度を評価してよいのかという批判もある。配点はそれほど高くないとはいえ、受講態度のような抽象的、主観的な評価項目をどのように処理すべきかを検討する必要性が残されている。

一方、授業の最後にはレポートを課すことになっているが、このレポートの評価も、クラス間の評価の差を生み出す原因となっていることが考えられる。レポートにおいて問題となる点は、その内容と配点の仕方であるだろう。内容については、基本方針などでも特に規定されておらず、また、授業内容が、健康・スポーツ科学に関連しているものに限られているとはいえ、多岐にわたって

るため、様々なテーマが課題として与えられており、そこに、難易度の違いが生じている可能性が考えられる。また、配点についても、レポート得点の総点（満点）は決められているが、最低点をどこに設定するかで、その得点分布に違いが生じているようである。「体験、実習を通してなされる理解」が本授業の目的であることから、レポートにはあまり大きなウエイトを置くべきではないと考えている教官もあり、採点方針に影響している可能性があるかもしれない。

(3) 対 策

以上挙げたような問題点が、FDにおける討議及び筆者の個人的な考察から浮かび上がってきた。これらに対して、今後その改善策を検討していかなければならないが、ここでは、いくつかの提案を試みる。

まず第一に、基本方針によって各評価項目への配点についての教官同士のコンセンサスは得られているが、さらに、評価項目ごとにおける教官裁量部分についての評価基準の統一が期待されることであるだろう。そのためには、各教官がどのような理論的根拠や判断基準に基づいて評価を行っているのかを確認するとともに、どのようなところで考え方や意見を収束させるのかを議論しなければならないだろう。各教官が持っている様々な根拠や基準は、それ自体としては、いずれも、正当、適正なものである可能性があることから、「クラス間の公正、公平」を実現するという観点から、統一的な評価基準を見つけ出していく必要があると思われる。

また、基本方針の吟味も必要であるかもしれない。すなわち、各評価項目への配点が果たして妥当なのかどうかを再考する必要があると考えられる。これは、クラス間の評価の分布にばらつきが見られるかどうかに関係なく、検討されるべき問題であると思われる。「健康・スポーツ科学実習」という授業の評価として、出席点やレポートの配点は現状でよいのかどうかを、授業の目的や目標と照らし合わせて検討を加えることが期待されよう。その際、はたして詳細な得点化が必要なのかどうかといった問題も考えなければならないかもしれない。健康・スポーツ科学に関する基本的、基礎的技能を習得するということが授業の目的であるとするならば、基準を満たしているかどうかといった合否のみによる評価のほうが適切であると考えられることでもあるだろう。

3. 健康・スポーツ科学講義について

(1) 現 状

全学必修となっている健康・スポーツ科学科目には、もう一つ、「健康・スポーツ科学講義」がある。この授業は、1年次前期または後期に開講されており、健康・スポーツ科学実習との連携を図りながら、主として講義形式で行われている。担当しているのは常勤の専任教官のみであり、クラスは指定制となっている。共通テキストとして、九州大学健康科学センター編「健康と運動の科学」(大修館書店)を用いている。しかし、この科目においても、かなりのクラス間の評価得点のばらつきが認められている。例えば、平成15年度前期における不合格者(60点未満)の割合は、9名の教官の中でも、0%から約15%にまで分布しており、評価基準の再考の必要性がうかがわれる。

この健康・スポーツ科学講義では、成績評価は、出席状況、授業時の小テスト・レポート、学期末試験等によって行われているが、健康・スポーツ科学実習と異なり、共通の評価基準は設定され

ていない。授業時の小テスト・レポートの提出を出席確認に用いるとともに、それらにいくらかの評価点を与えている教官もいれば、出席は学期末試験の受験資格要件の確認だけに用い、最終評価は、学期末試験の点数のみで行っている教官もいるというのが現状である。ただし、ほとんどの教官は、基本的には、絶対評価によって成績評価を行っているようである。

授業内容も、共通のテキストを使っているとはいえ、必ずしも統一されているわけではない。というのも、健康・スポーツ科学という学問が、比較的新しい複合科学であるために、担当教官の専門領域が多岐にわたっており(生理学・生化学、疫学、社会学、心理学など)、また、健康・スポーツ科学の共通の基礎と考えられる内容についての学問領域内でのコンセンサスがまだ得られていないという実情があるからである。したがって、授業内容も、それぞれの教官の専門性が強調されることが多く、それに伴って、学期末試験の内容や評価の基準にも相違が生まれている可能性が指摘されている。

なお、各教官のコメントからは、授業で行われた内容と学期末試験問題との不一致はあまりないという印象を筆者は受けている。すなわち、いずれのクラスでも、授業で取り上げられなかった内容が試験の問題に出されているということはほとんどないようである。

(2) 問題点

前述した現状を踏まえて、成績評価に関する健康・スポーツ科学講義の問題点をいくつか指摘することにする。

最も大きな問題は、共通の評価基準が設定されていないことであるだろう。もちろん、健康・スポーツ科学実習のところでも論じたように、共通の基準を設けても必ずしも公正な評価が実現できるとは限らないのだが、「健康・スポーツ科学講義」という同一科目である以上、ある程度の共通性を確立しておく必要があると思われる。しかしながら、FDでの討論から、それぞれの教官の講義科目における評価のあり方に対する考え方には、かなりの隔たりが存在しているように、個人的には感じているところである。とはいえ、健康・スポーツ科学実習では、数年間の検討を経て共通の評価基準を設定しえたことを鑑みれば、講義科目においても、ある配点基準に収斂させることは不可能ではないと考えられる。

もう一つの大きな問題として、専門性の問題がある。前述したように、健康・スポーツ科学は複合科学であり、今なお、広がり続けている領域であるために、どのような内容をどのような立場(理論)に立って教授するべきかということに対して、様々な考え方が存在している。同じような健康に関するテーマを扱う場合でも、生理学的な説明をするときと社会的な理解を試みようとするときとは、全く異なる知識や情報が伝えられることがありうるのである。共通のテキストを利用したとしても、担当教官の専門性に依じて、強調点に違いが生じることは否めない。健康の重要性は多くの人に認識されているとともに、現代社会も健康に対する理解の深まりを要請していると考えられるが、それを研究、教育する側の学術的、教育的コンセンサスがまだ不十分なままとなっているのである。さらに、このような科学領域における問題に加えて、全学教育でどのような内容を学生に習得させるべきかという問題も残されている。すなわち、全学教育全体の目的、目標に合わせて、健康・スポーツ科学講義ではどのような内容を教授すればよいのかがあまり明確になっていな

い可能性がうかがわれる。もちろん、各教官の意識の中には、指導すべき内容についての確たる考えがすでにあるのかもしれない。もしそうであるならば、現在の問題は、そのような考えが、共通認識にまで至っていないということになるだろう。

(3) 対 策

以上、健康・スポーツ科学講義の現状と問題点を指摘してきた。これらの問題を今後どのように解決していくかについて、FDでも討議を重ねたが、健康・スポーツ科学実習についてなされたほどの方向づけは見出されなかった。担当教官間の講義科目に対する考え方には、未だ隔たりが存在しているようで、まずは、それぞれの考え方に対する相互理解を深めていく必要性が感じられた。学期末試験と授業時の平常点（出席や小テスト・レポート）の配点をどのようにするのか、教授内容をクラス間でどこまで共通なものとするのか、どこまで教官個人の裁量を認めるのか、全学教育にふさわしいものとしてどのような教授内容を設定するのか、などの問題に対処していくためには、まずは、担当教官同士の十分な意見交換や討議が望まれよう。

4. ま と め

以上、全学教育で行われている健康・スポーツ科学実習及び健康・スポーツ科学講義における成績評価のあり方に関して、現状分析、問題点の指摘、そして今後考えられる対応策について論じた。これらの科目が、それぞれ、複数開講されている同一科目である以上、そこに評価の仕方の違いがあるべきではないと考えられるが、成績評価に関するデータの分析から、クラス間に評価のばらつきが存在していることは否定できないところとなっている。もちろん、クラスごとの相対評価を取り入れれば、表面上の問題（クラス間の評価分布の相違）は解決するかもしれないが、それは我々の望むところではない。今後、授業で扱う内容に対する吟味も含めて、評価項目の再設定、各評価項目の重みづけ（配点）、評価方法など、成績評価のあり方について、総合的な議論をさらに深めていきたいと考えているところである。